森田庄兵衛による新和歌浦観光開発について

ON THE TOURISM DEVELOPMENT IN SHINWAKAURA

BY SYOBEI MORITA

田中 修司*

Shuuji TANAKA

The purpose of this paper is to clarify the tourism development by Syobei Morita. He planed this enterprise to cooperate with Nankai Railway Co.Ltd. and other. but he could not obtain their cooperation. So he constructed the road include two tunnels, waterworks, and land development by himself. In 1917, he established Shinwakauratochi. Co.Ltd. and started tourist hotel named Shensyuukan. But in 1924, the company went bankruptcy affect by depression in Japan by panic after first worldwar and Kanto district earthquake. He was a pioneer of Shinwakaura development. The result was that he defended the adjoining place Wakaura that is a histric spot from the development of the modernization.

Keywords *Shinwakaura, Shobei Morita, tourism development, Shensyuukan, Nankai Railway*
新和歌浦、森田庄兵衛、観光開発、仙集館、南海鉄道

1. はじめに

1900年代初頭、南海鉄道¹⁾（以下南海と略す）や和歌山の市電が開通し、大阪の中心部から当時の和歌山県と歌浦町までの交通の便が飛躍的に向上した。ちょうどその頃から1920年代半ばにかけて、森田庄兵衛が和歌浦町内の海岸景観に恵まれた新和歌浦²⁾と呼ばれる地域で観光開発をおこなった。

この地は昭和戦後の高度経済成長期には年間観光客約300万人を数えることもあったが、この頃をピークに観光客は漸次減少し、廃旅館による景観の悪化など深刻化していた。しかし、近年徐々に再開発の兆しが見え、今後の地域整備の方向が模索されている。

新和歌浦は、当時の南海の終着駅和歌山市駅から程近い距離にあり、南海沿線の臨海観光開発の一事例とみることができる。この沿線の臨海観光開発については、浜寺に関しいくつかの既往の研究があるが³⁾、新和歌浦に関しては「新和歌浦今昔物語」⁴⁾のみで、これは当時の新聞記事や聞き取り調査などから構成され、執筆者が記しているように開発史の概略について報告するものに留まっている。

この度筆者は森田の遺族から、森田家所蔵史料の調査を許可され、本開発に関わる多くの史料を得た。（「森田家史料」と略す）。この史料は、戸籍謄本、登記簿類、不動産に関わる公正証書・契約書、建設関係の仕様書・見積書、債務明細書・資産負債目録、会社設立趣意書・定款など60数点、書簡類29点、建築図面19点⁵⁾、地図類10点⁶⁾、写真10点、絵画2点からなる。本論はこれらを中心史料として、森田によるこの地の観光開発について報告するものである。

なお、森田による観光開発は、筆者の調査によると 図1 に示し

た彼が買収した区域のうち、章魚頭姿山を主峰とする稜線の南側でのみ行われた。ここは出島と呼ばれた地域の一部で、1911年頃開発に伴い「新和歌浦」と名付けられた⁷⁾。この名称は当時行政上の字名や町名ではなく、その範囲は必ずしも明確ではないが、本論では稜線より南側の森田が開発した地域を新和歌浦と呼ぶことにする。当時出島は海草郡和歌浦町の一部で、1933年に西に隣接する雑賀崎村と共に和歌山市に編入され現在に至っている。また、現在では本論でいう新和歌浦は、行政上でも同名の町名が付けられている。

2. 開発前史

2-1 開発前の新和歌浦

開発される前の新和歌浦の状況を知る史料としては、参謀本部陸軍部測量局によって1886年測量された二万分一仮製地形図の「和歌浦」⁸⁾があり、その他地元雑賀崎小学校の100年史などがある。これらから観光開発以前は人家もほとんどない未開の地であったと推測される。

2-2 和歌浦について

一方、新和歌浦の東に隣接する和歌浦は古くからの名所で、この観光開発は、新和歌浦開発とも関係するので、簡単に紹介する。

和歌浦には紀州徳川家藩主頼宣が父家康の霊をまつた東照宮のほか天満宮、玉津島神社などがあり、万葉の歌人山辺赤人の歌でも知られる。

明治期、和歌浦を訪れた遊覧者は、この地や周囲の社寺に参拝する道者、海水浴客、療養者、避暑避寒者などである。公共交通機関

* 和歌山県教育委員会 博士(工学)

Wakayama Prefectural Board of Education, Dr. Eng.

は1903年南海が難波一和歌山市間を全通させ、市内電車は和歌山水力電気により1909年に和歌山市駅一和歌浦口間が開通していた。

このように大都市圏と結ぶ交通機関が整備され、大阪方面からの観光客の増加があったものの、迎え入れる和歌浦側には様々な問題があった。例えば、明治42年6月19日の和歌山新報の記事には、南海鉄道の大塚専務が、電車開通により大阪方面からの客は増えたが、彼らの不満は大きいとし、今後は大都市圏からの客を誘致できる洗練された宿泊施設が必要と主張している。なお、近代和歌浦の観光開発については高嶋雅明による研究⁹⁾がある。

2-3 森田庄兵衛の経歴

森田家史料の中に「故森田庄兵衛履歴」と題し文末に「原文 森田逸平記す」とあるA4活字印刷された史料がある。逸平は森田の次男であって、大正10年12月24日に家督を相続し¹⁰⁾、森田の新和歌浦開発についての経緯を知りえた人物と推測する。しかし、史料の裏付けが不明確であり、そのため本論では、この史料を参考資料に止め、この内容を他の森田家史料等から検証することに努めた。

森田は1862(文久2)年9月21日、和歌山県伊都郡妙寺町大字丁ノ町551番地(現在、同郡かつらぎ町妙寺)で、父正治・母クニの長男として生まれ、勝之助と命名された。¹¹⁾

彼は1879年から1882年までの間慶応義塾で学び、帰郷した翌年1883年3月、庄兵衛を襲名し家督相続を行った。¹²⁾ 森田家は、帯庄と称する屋号を持つ酒造業を営み、彼が経営した時代1895年度の生産量は約4080石、県内1位、全国で25位に入る大酒造家であった。¹³⁾ 彼はその他、1888年に自由党の機関紙とした紀陽新聞の創刊に加わり、伊都銀行の創立や、和歌山県農工銀行・四十三銀行などでも重要な役割を果たした。¹⁴⁾

彼の関わった事業の中で特に注目されるのが紀和鉄道(現在のJR和歌山線)への参画である。この鉄道は、五条一和歌山間を1900年に開通させ、既設鉄道とつながり和歌山市と東海道とが結ばれることとなった。森田は、この鉄道の創立委員6名の一人で、開通前の短期間であるが取締役を務めた¹⁵⁾。

その後彼は1911年、多額納税者として貴族院議員に選出されている¹⁶⁾。歿したのは1924(大正13)年11月5日、同県海草郡和歌浦町1482番地、享年62才である。¹⁷⁾

3. 森田庄兵衛による新和歌浦開発

3-1 着手

1924年の彼の逸兵への手紙¹⁸⁾には明治41年からこの事業を始めたと記している。この記述は16年後のもので正確な年を特定するには不足であるが概ねこの頃より事業に着手したものとみられる。

3-2 土地の買収

森田が旧和歌浦町、旧雑賀崎村、旧雑賀村で観光開発に直接関わって買収した土地は表1のとおりである。

買収した土地は約44,400㎡で、この面積は逸平による履歴書に記された森田が買収した広さ45町とほぼ一致する。移転登記された年月は、大半の面積を占める部分は1910(明治43)年1月で、後若干の部分が翌年と、1915年となっている。

買収地の特定は、まず森田家史料に含まれる、「資産台帳」¹⁹⁾、同じく所有地を色塗りした「新和歌浦略図」「雑賀村大浦」⁶⁾と記された土地図、その他同史料の地図類を参考にして、森田が所有した

表1 森田による買収土地一覧

町村、字名	地番	買収年	面積(反)	地目	*
和歌浦町					
字出島	1482-1	M43.1.15	129.007	山林	O
	1482-2	M43.3.11	9.214	山林	T
	1482-3	M44.5.16	0.027	郡村宅地	T
	1482-4	M44.5.16	0.100	郡村宅地	T
	1483-	M43.3.11	0.203	畑	T
	1484-1	M43.3.11	1.413	畑	T
雑賀村 大字西浜					
字大浦西山	1495-5	M43.1.15	233.123	山林	O
字鶴西之坪	1046-	T4.9.6	0.827	畑	S
	1063-	T4.9.6	1.613	畑	S
	1064-	T4.9.7	0.601	畑	S
	1066-	T4.9.7	1.006	畑	S
	1067-	T4.9.7	1.904	畑	S
	1068-	T4.9.7	1.604	畑	S
	1069-	T4.9.7	1.512	畑	S
	1070-1	T4.9.7	2.416	畑	S
	1071-	M44.5.8	1.021	畑	S
	1072-	M44.5.8	0.211	畑	S
	1073-	T4.9.6	0.829	畑	S
雑賀崎村 大字田野					
字兵庫谷	149-1	M43.1.15	27.526	山林	O
字次郎松谷	87-		1.216	畑	
	88-	M44.6.21	0.708	山林	N
	88-内1	M44.6.21	0.017	畑	N
	88-内2	M44.6.21	0.006	畑	N
	100-1	M43.1.15	21.718	山林	O
字古羽賀	52-	M43.1.15	9.404	山林	O

44町7反9畝26歩=444,287㎡

* 前所有者 O:小笠原菅至 T:高橋彦兵衛 S:雑賀栄蔵 N:中原市松

史料1 資産目録B¹⁹⁾

図1 森田が買収した土地の範囲 1/15800 一点鎖線と海岸で囲む範囲元図は「新和歌浦並に雑賀崎全図」⁶⁾、一点鎖線とゴシック文字は筆者加筆

と見られる土地の地名・地番を把握し、それらの周辺の土地も含めて和歌山地方法務局所蔵「(旧)土地台帳」で所有を確認した。

買収した土地の範囲を、森田の事業を継承した南海遊園 KK が作成した地図「新和歌浦並に雑賀崎全図」⁶¹⁾ (森田家史料) の一部分に筆者が修正・加筆した 図1 で示す。なお、南海遊園の所有地と森田が買収した土地は、森田が買収地の一部を分譲・売却しているため、異なっているが、旧土地台帳等の調査から、その部分は第1・第2トンネル間の海岸沿いあるいはその近くのみであり、この部分を修正し 図1 を作成した。

表1 の和歌浦町字出島は、図1 では田ノ浦より東のブロックで、章魚頭姿山稜線より南側。雑賀村大字西浜は、同ブロック同稜線より北側。雑賀崎村大字田野は、西側ブロックに該当する。

大阪難波から和歌浦までの交通の便が飛躍的に向上したことから、森田が新和歌浦の土地を買収した1910年前後、和歌山市では和歌浦の観光開発が期待され、「紀伊毎日新聞」と「和歌山新報」の両紙上で、そのあり方や近代的開発の是非を巡り、様々な報道がなされた。²⁰⁾

前者では森田の新和歌浦開発について「和歌浦の新天地」との見出しで次のような記事が掲載されている。

「和歌浦の勝景は以つて世界に誇るに足るべきものあるも、時潮は天然の景致にのみ依頼するを容るざるものあり、而して之れに人工的設備を加へんか、たちまちにして俗了し去り折角の風趣を破壊し矯角殺牛の失敗に陥るの虞レアリ(ママ)、和歌浦の経営も頗る慎重を要するものあるが、伊都郡の素封家森田庄兵衛氏は大ひに此の点に意を注がれ、生ま中在来の名区に姑息なる加工を施さんよりは別に新天地を拓き和歌浦の輪廓をして益々擴大すべしとて今回和歌浦出島に接續したる一區劃を購入し之に新設備を加へ天晴れ公園たらしめんとの計劃を立て、まづ之れに接續すべき新道路《幅二間》を開通すべしと… (1910年3月20日) この記事では、森田は名所和歌浦で新たな観光開発を行えば、風致が破壊される恐れがあり、そのため隣接地に新天地を開発すべきと考えていたことが報道されている。

この頃は、開発の是非を巡る議論だけでなく、例えば和歌浦の池や湿地を埋め立てて遊園地をつくる計画を実施しようとしたり、実際に観光用エレベーターが設置されたりしたのだった。²⁰⁾しかし、森田はこれらを否とし、新天地新和歌浦開発に向かったのであった。

森田の開発により和歌浦町内の観光開発の中心は新和歌浦に移り、和歌浦は付近の湿地が埋め立てられはしたがその後新たな観光地化は進まず²¹⁾、かろうじて名所和歌浦の風致は守られる結果となった。

3-3 南海鉄道大塚惟明との交流・大塚書簡

森田家史料の中には、南海鉄道社長(1910年7月～1915年4月)を務めた大塚惟明²²⁾からの私信12通がある。この内、1910年に差出されたものが8通(推測²³⁾含む)、1911年のものが3通、1913年が1通ある。特に注目される内容は下記の通りである。

a) 地代とか道路費とかに貴方より難題を持ち込めば南海予算小額に付きそれだけ設備費減少し出嶋仙境に煥爛の義を尽くしたる建造物を現出する能はず(ママ)此一區画の發展如何は要するに南海の設備如何に在り故に貴兄は全然目前の小利を離れ道路も敷地もすべて寄付的態度にて南海を彼地に迎え大々の設備を為さしめ以て此一画内に燈明を揚げ候御考えとなられ度事

(1910年4月12日)

一、地代とか道路費とかに貴方より難題を持ち込めば南海予算小額に付きそれだけ設備費減少し出嶋仙境に煥爛の義を尽くしたる建造物を現出する能はず(ママ)此一區画の發展如何は要するに南海の設備如何に在り故に貴兄は全然目前の小利を離れ道路も敷地もすべて寄付的態度にて南海を彼地に迎え大々の設備を為さしめ以て此一画内に燈明を揚げ候御考えとなられ度事

史料2 南海、大塚惟明からの書簡 (1910年4月12日)

- b) 出嶋に新遊地を拓く事は小生のみ主張で重役一同は尚早論で…
…経営に着手する事に就ては小生は非常に苦心に御座候
…南海は何萬と云う資本を投ずる次第なれば各重役が大に躊躇逡巡するも尤もの事と存じ出嶋に対しかかる死活的計画を為さんとするに貴兄が地代を要求する如き事あれば恐らくは南海は手を引き単に片男波付近《和歌浦》の計営で満足するに至り折角小生が苦心して世上に引き出さんとする出嶋もツマラヌ場所と相成り其發展は遅々として進まぬ事と存じ右の次第にて至急御決心の上何らの後返事願上候 《 》内筆者 (1910年5月13日)
- c) 尚右出嶋経営は小生に於ては絶対に放棄したるにあらず貴下に於て南海を頼りとせず当方の希望通り道路其他の設備を為し尚右地所を提供せば園地一帯を繁榮せしむべき中心建造物は如何に繰合ハすも(ママ)着手いたし度考に罷有候御一考可被下候

(1911年1月6日)

森田が土地を買収した1910年頃、彼の構想は、南海が観光施設を建設し、彼自身は南海から地代や道路費を受け取るというものであった。ここで道路費とは、建設の負担金のようなものであろうか。大塚は森田の新和歌浦開発を基本的に支持していたが、南海の重役陣は、進出には多額の開発費がかかり、さらにその他の費用負担もあることから進出には否定的で、社内の合意が得られなかった。そのため大塚の個人的支援のみに留まらざるを得なかった。そのため大塚は森田に、当面は南海を頼らず独力で道路整備等を行い、土地の無償提供など南海進出の条件を整えるよう進言していたのだった。

3-4 道路・水道施設の建設

次に紹介する記事はいずれも紀伊毎日新聞紙上のものである。

- ・1911年1月21日 「新和歌浦遊園地」との見出しで
「…、設計既に完成したれば、いよいよ二月中旬を以つて盛んなる起工式を挙げる由にて同所を新和歌浦遊園地と命名すべしと、…出嶋より同所に通ずる幅二間の道路も新たに開かるゝなり。」
- ・1911年6月13日 「新和歌浦落成期」との見出し

「森田庄兵衛氏の経営にかゝる新和歌浦遊園地は原庄組にたいて道路及び隧道開鑿中なりしが道路は既に竣工し隋道は目下一部煉瓦巻工事中にて日ならず竣工の見込みなり而して更に山腹の高地に運動場を設くべく目下取擴めにて同所には一間幅の道路を開修する筈にて是等の工事は七月中旬において全く竣成するにつき同月十五日頃盛んなる落成式を挙げる筈なり尚ほ同所に用水を引かんためモーターを据付け新式唧筒を以つて他より水を引き貯水池をも設けて供給する設計中なり同遊園地竣成の曉

は海水浴客のために多大なる便あるべし」

これらの記事のほか当時同紙の主筆であった三木幸兵衛²⁴⁾による「新和歌浦」と題した探報連載記事が3回掲載されている。

・「第二隧道は今煉瓦巻き最中、…隧道を通り抜けて右手の坂を攀ち登ると山の半腹、海拔約百二十尺といふところをば三段に刻まれて広い運動場が出来る、…」 1911年6月13日(第一回)

・「飲料水が缺乏だろ、なんてケチなこといふべからずだ、山の背後に一大貯水池が出来て、六馬力のモーターで水を山嶺に引き揚げる、それからパイプでお好みの處へ送る… 何がさて獨力で数万金を投じて口付けた大事業…」 1911年6月14日(第二回)

これらの記事から森田がおこなった工事は「隧道を含む道路建設」、「三段の広い敷地の造成」であったことがわかる。1911年2月起工式、6月13日時点で第二隧道を除く道路および第一隧道は完成していた。第二隧道は貫通しているが内部煉瓦工事中である。7月中旬に竣工式予定していた。三段の造成地もこの竣工式までに完成の予定であったのではないかと推測される。施工は原庄組と記されているが原正組の誤りとみられる²⁵⁾。森田個人の事業であった。

なお、1909年出版の地図と1912年6月出版の同地図を比較しても²⁶⁾、海岸沿いの道路が上記1911年に完成したことが読み取れ、山腹の道路もほぼ同時期に完成したことがわかる。また後者の図には森田が買収した土地には「新和歌浦遊園」と記され、このように命名されていたことも確認できる。

水道設備は設計中と記されているが、竣工は1914年であった。²⁷⁾

写真1 第1,2トンネル 何れも東側ポータル、撮影年不明
(左)第1:長約55m、幅4.8m、ポータル上部に山形簾の森田家紋を掲げる。(右)第2:長約39m、幅4.8m
溝端佳則氏蔵絵葉書より

3-5 土地の分譲

旧土地台帳によると、森田が買収した表1の土地の内、宇出島以外は森田が亡くなる1924年までは登記簿上森田の所有であったが、開発されずほぼ手付かずの状態に残された。一方出島は1924年までに全部で75筆に分筆され、その内出島1482は68筆に分筆された。この68筆の内21筆と1483の1筆、計22筆は、道路等の工事が完成した直後1912年3月から1年以内に分譲され、その後5筆が1916年10月までに分譲されている。土地購入者は20名である。これら27筆の所在地は、所在地が不明な1482-10、1筆を除き、両隧道間の新設道路より山側で、その内15筆はこの道路沿いに位置し、両隧道間を隙間なく埋めている。27筆の購入者は大阪市が圧倒的に多く21筆、その他5筆が和歌山市、1筆が京都市在住となっている。

一方、上記道路より海側の土地が分譲されたのは遅く、1筆が1918

年に森田経営の土地会社に移った外は、1922年までは森田個人の所有地であった。この海側は新和歌浦でも最も早期から建物が建てられた場所であり²⁸⁾、大小の旅館や観光客相手の施設が立ち並んだ。これらのことから森田は、海側では借地借家経営をしていたものとみられる。海側に旅館等が立ち並ぶと、道路沿いの山側は眺望は望めないことから、観光客相手の商業地として分譲されたのであろう。

別荘地開発の観点から見ると、新和歌浦は背後に山が迫り適地は多くないが、それでも出島の中央より西側山腹には少ないながらも適地が見られる。しかしこの地の分譲はあまり進んでいない。

写真2 道路開通数年後の新和歌浦 第1トンネル付近から第2トンネル方向を見る、1912~1916年頃、道路が完成し海側に建物が建ち始める
溝端佳則氏蔵絵葉書より

3-6 新和歌浦土地株式会社の設立

1917年10月、この土地会社が設立された。森田家史料に含まれる同社「定款」によると、資本金50万円、発行株式数10,000株。森田は金銭以外の不動産・動産を出資し、これにより発行株式の97%を得、自らが社長を務めた。

会社設立の目的は同史料によると、土地の売買・貸借・開拓、家屋の建築・建築土木の請負・土地測量・家屋の売買・貸借・農園経営、旅館・料理業・美術骨董品売買などとしている。

土地会社の主な事業の一つとして「仙集館」の経営がある。森田はそれまで自らが旅館等の経営に乗り出すことはなかったが、ここに来て初めてこれらの経営に着手する。1919年発行の名所案内²⁹⁾によると、旅館兼料亭として記されたこの施設は同年6月1日、土地会社の直営事業として開業した。資産目録³⁰⁾によると、本館の所在地は出島1482-25で第2隧道東口の傍らに位置し、全4層、1階は煉瓦造の半地階、2階以上は木造、総床面積は様々な値が見られるが500坪前後であった。支配人は居谷覚が務めた³¹⁾。

本館とは別に岬の突端には和歌浦湾を眼下に見る月見堂、山の中腹には凌霄閣(れいしょうかく)・温清齋(おんせいさい)・観漁庵(かんぎょあん)などの別館のほか人造滝・庭園・茶室など³²⁾、本館西側の造成地脇には4層の煉瓦造別館を設け³³⁾、本館下水際には煉瓦造の水族館建設も概ね完成させた³⁴⁾。そのほか書画骨董の美術館や海水浴客向けの施設なども設けていた³⁵⁾。このように仙集館は広範囲な用地に様々な施設を設けた総合的な観光施設であった。

土地会社では仙集館の経営のほかに、不動産経営により借地料・家賃のほか給水料を得ていた。このことは注記19)の「資産目録B」に記されている。ここでは借地料として、望海楼・望海楼支店・米栄支店・すし由・四海亭・清涼亭・明光亭・四海亭山茶店・明光亭山茶店などの旅館・茶店のほか5名の個人から入金がある。家賃と

写真3 土地会社設立後の新和歌浦 写真2と同様の方向から見る
1920～1923年頃とみられる 溝端佳則氏蔵絵葉書より

写真4 土地会社設立後の新和歌浦 写真3とは逆方向、西側から撮影
大正12年10月末の印がある。撮影時期は 写真3と同様とみられる。
溝端佳則氏蔵絵葉書より

しては、望海楼からの入金がある。これら借地料・家賃合わせて5927円51銭である。なお、家賃収入では望海楼からが3600円あり過半を占めている。また、これらより当初望海楼の土地建物は森田の所有であったことが分かる。給水料では上記茶店を除く旅館及び9名の個人から合わせて1171円70銭の収入が記されている。この内望海楼・米栄支店・すし由からの給水量収入が65%を占め、この地では仙集館を除けば中心的営業活動を行っていたことが推測される。

3-7 土地会社の破綻

森田家史料によると、会社設立約4年後の1921年には新たな共同経営者を求め新会社の設立等を模索している³⁵⁾。結局この年一連の試みは結果しなかったが、新和歌浦土地会社の経営は相当苦境に陥っていたのではないかと推測する。

翌1922年9月から11月にかけて、それまで分譲せず借地としていた、森田名義の海側の土地3,303反(3277㎡)を売却する。これで仙集館敷地や土地会社名義の1筆を除けば、第1～2トンネル間の海側用地はすべて売却された。³⁶⁾

その後、森田家史料の1924年9月19日付け3通の契約書によると、森田は望海楼の経営者中尾文三と、新和歌浦に所有する不動産・動産・権利の売買について契約を結ぶ。史料3³⁷⁾内容は、動産・

史料3 中尾文三との売買契約書

史料4 森田から逸平への書簡

不動産の代金を33万円とし、この代金は森田の負債償却に充当するもので、各債権者に債務整理のため弁済の必要が生じるに従い中尾がその額を支払い、そのつど相当不動産等の権利を移転するものである。

なお、この史料の1通の署名欄には「新和歌浦土地株式会社 右代表者清算人 森田庄兵衛」の記載があり、このことから契約の時点で土地会社は解散していたとみられる。

破綻の理由について、1924年、亡くなる直前の森田による逸平へ書簡[史料-4]³⁸⁾には次のように記されている。1923年9月の関東大震災の影響で不動貯蓄銀行・滝本屋酒店大垣・鈴木商店等の宴会が中止となり、営業収入が皆無となったことが最終的に仙集館を初めとする会社経営の息の根を止めた。さらにこの書簡には、最初1万円で始めたこの事業であるが、所有地所15万坪、坪単価10円と見ても150万円の価値あるとみて借金を重ねた。危険なこととは承知していたがとうとう行き詰ってしまったと記されている。

そのほか逸平は森田の新和歌浦における事業について、森田家史料、粉河税務署宛の相続税課税価格再審請求書、1927年4月、において次のように記している。

「…資金ハ勿論経営モ南海及和水共力(ママ)に依ラントノ管ナリシモ両者反目ノ事情其他ノ為メ其事ナラズ遂ニ個人経営ノ止ムナキニ至リ過大ノ資金ヲ固定セシムルニ至リタリ…」

筆者は既に3-3において、森田は南海の協力を得て開発を進めようとしていたことを述べたが、南海だけではなく市電を運営している和歌山水力電気の協力も得ようとしていたこと、さらに両社の反目もあり、両社からの協力が得られず、止むを得ず実質個人事業と

なったことが分かった。

その他この文書には、一次世界大戦による好景気があったものの戦後恐慌・関東大震災と続き、日本経済が大きな打撃を受けると、それに伴い会社の経営も行き詰る結果となったことも記されている。

その後の新和歌浦経営は、中尾ら8名が発起人となり、1925年8月より株式申込受付を開始した南海遊園会社を引き継がれた。³⁸⁾

4. 南海鉄道沿線における臨海観光開発

この沿線の観光開発を南海の社史³⁹⁾等から年次順に挙げると、まず1905に海水浴場を開設した浜寺があり、次いで1911年に遊園地を開いた淡輪、1913年に阪堺電気軌道により潮湯場が開かれた大浜がある。そして1919年に仙集館を開設した新和歌浦が続く。どの開発も年次を一言で表すことは困難であるが概ねこのような順であろう。これらのうち浜寺については(注記3)に記した橋爪、竹村らによる詳しい研究があるので、浜寺と新和歌浦についていくつかの観点から比較しておきたい。

地形的には、浜寺は大阪湾岸南部の比較的平地に恵まれた白砂青松の地であるが、後者は紀伊水道に面したリアス式海岸であり傾斜地がほとんどである。このような地形的差異は、開発の様態に大きく影響を及ぼし、前者では海水浴場を中心とした開発で、スポーツイベントなども積極的に開催された。後者では海岸美を愛でるための展望が優れた施設などが中心となった。

時間的には、南海が開通した明治・大正期では、浜寺は南海で概ね30分程度、それに対し新和歌浦では和歌山市まで最速の急行で1時間40分前後、さらに市電(和歌山水力電気)で30分前後、合わせ2時間10分程度が必要であった。⁴⁰⁾ このように新和歌浦は長時間の電車利用を必要とし、また南海のみでは到着できないという不利を背負っていた。

このような差異の下、両開発とも大塚が関わっていることは興味深い⁴¹⁾、浜寺では南海自身が直接開発に積極的に関わったのに対し、新和歌浦では少なくとも森田の時代では、最初の目論みとは異なり実質森田の個人経営であった。また、マス・メディアとの関係においても、浜寺などは南海が海水浴場を設置した翌年、1906年から大阪毎日新聞と連携し、鉄道と新聞が手を結び経営に当たったのに対し、新和歌浦では特別な関係は見えてこなかった。

このようにみてゆくと、新和歌浦は南海沿線の歴史ある観光開発の一つであるが、浜寺との比較においては開発された様態、また鉄道やマス・メディア等との関係において大きく異なっている開発であった。

5. おわりに

森田は1910年、彼が買収した土地の殆どを入手し、1911年後半、道路・土地造成等を、1914年には水道施設工事を完成させた。1917年、彼は新和歌浦土地会社を設立し、広大な敷地に料理旅館「仙集館」を中心とする海浜総合観光施設を建設し、自ら経営を行った。しかし、第1次世界大戦後の不況・関東大震災等の影響を受け、土地会社の経営は行き詰まり、1924年会社は売却された。

森田の開発により、和歌浦町の観光開発の中心は新和歌浦に移り、このこともあり名所和歌浦の新たな開発は進まず、名所の風致は守られる結果となった。

当初森田は、南海・和歌山水力電気の資金・経営により開発をおこなおうと考えていたが、多額の開発費を要すること、また両社の協力体制が築けなかったことなどから両社は進出せず、森田による単独の開発となった。

新和歌浦開発は、明治・大正期に開発された南海沿線の歴史ある観光開発である。しかし、同じ沿線でも、先駆した浜寺と新和歌浦を比較すると、前者は大資本の会社経営であるとともにマス・メディアと連携の下経営に当たったが、後者は実質個人経営であり、大きな相違があった。

現在新和歌浦の再整備が模索されているが、森田による計画が今後の参考になるのではないかな。森田の開発では、第1・2トンネル間の道路沿いだけではなく背後の山全体を生かして計画した。しかし現在ではほとんど生かされていない。また、再整備に当たっては当時の数少ない遺産、第1,2トンネルの保存・活用を提案したい。

本研究にあたり森田家の史料を提供くださった森田清三氏に深く感謝する次第である。また当時の絵葉書他の資料を提供いただいた溝端佳則氏、ご指導いただいた三尾功先生にもお礼申し上げます。

注

- 1) 南海鉄道は1885年より営業を始めた阪堺鉄道を源流とする。南海鉄道自体は1895年創業し1944年合併により消滅したが、1947年分離南海電鉄として再発足し現在に至る。
- 2) 1950(昭和25)年瀬戸内海国立公園に編入されている。
- 3) 南海沿線の海浜観光開発についての既往の研究には下記のものがある。
 - ・橋爪紳也：海水浴場の近代―マスコミの湾岸戦略―、海遊都市、白地社、第7章、1992年2月
 - ・竹村民郎：第5回内国勲業博覧会開催期におけるレジャー革命―大阪毎日新聞社、南海鉄道による浜寺海水浴場創設と関連して―、大阪産業大学論集 社会科学編、73号、pp.53-69、1989年1月そのほか、綿貫慶徳：明治後期から大正期における大阪毎日新聞社の浜寺海水浴場経営に関する史的考察―新聞販売ターゲットとしての新中間層に着目して―、体育史研究、第21号、pp.1-14、2004年3月
- 4) 新和歌浦今昔物語は、和歌山大学システム工学部 奥俊信研究室・足立啓研究室における演習の成果報告、2000
- 5) 建築図面を、図名・枚数・内容の順で以下に記す。
 - ・仙集館本館配景図 1枚(建築透視図)
 - ・仙集館設計図 5枚(煉瓦造2階建一部3階の別館の図、1/50 1/20)
 - ・美術品陳列販売所設計図 1枚(平屋、煉瓦造か、平面・立面図、1/100)
 - ・稻荷神社 6枚(立面図 2種有り 1/6 1/10)
 - ・新和歌浦遊園地住宅之図 3枚(用途不明、平面図・矩計図、1/50 1/20)
 - ・事務所建築図 1枚(単線のみの略図)
 - ・濾過池・浄水池・貯水池 1枚(平面図・断面図、1/50)
 - ・各池配置、各池高低比較図 1枚仙集館設計図のみ図中に「旭製作所一設計」との記載がある。
- 6) 地図類は下記の通りである。
 - ・海草郡雑賀崎村大字田ノ浦字区分図 1枚
 - ・海草郡雑賀崎村大字田ノ浦字古羽賀 1枚
 - ・ 同 次郎松谷 1枚
 - ・ 同 兵庫谷 1枚
 - ・海草郡雑賀村大字西濱字郷西之坪 1枚
 - ・ 同 字大浦小字東山山林 1枚以上6枚は筆致等が異なるものもあるが、買収した土地を緑色で塗り分けその面積を記している。買収の際に作成されたものとみられる。
 - ・図名無 1枚買収した土地を図示し、字ごとあるいは地番ごとに面積を記している。建設した道路も記されている。
 - ・新和歌浦略図 雑賀村大浦 各1枚・計2枚

同様の筆致で書かれているので同時期に作成された一組の図とみられる。特に前者は森田が開発した中心部分であり、所有地と既分譲地を色分けし、分筆された地番・購入者名が記入されている。土地所有の状況を「旧土地台帳」と照合すると 1922 年 9 月から 1924 年 9 月の間に作成されたとみられる。

・新和歌浦並に雑賀崎全図 1 枚

図中に「朱線内ハ南海遊園株式会社ノ所有地スキ土地」(ママ)との記載があり、森田の事業を継承した南海遊園が作成した所有地を表す地図であることが分かる。本図と土地範囲が同内容の図が森田家史料「南海遊園株式会社設立趣意書」1925 年 8 月、にあり、本図は森田が事業を売却した直後の土地所有を示す図であることも分かる。本地図類では唯一正確な地形図である。

7) 紀伊毎日新聞 明治 44 年 6 月 13 日 には主筆三木奎兵衛の記名記事が掲載され、三木自身が命名したと記している。この記事に先立ち同年 1 月 21 日の同紙には、新和歌浦遊園地との見出しで、この地を新和歌浦と命名すべきとの記述がある。

8) 地図資料編纂会：明治前期 関西地誌図集成、柏書房、1989 年

9) 高嶋雅明：近代の開発と和歌浦、和歌山地方史研究 17 pp. 32-37 1987. 8 和歌浦開発と和歌浦土地開発株式会社、紀州経済史文化史研究所紀要 10、pp. 25-40、1990. 3

10) 森田家史料、戸籍謄本による。

11) 前掲 10)

12) 松崎欣一：森田勝之助日誌について、慶応義塾福澤研究センター資料(1) 1985、p. 96、及び前掲 10)

13) 森田家史料「明治 28 年度全国酒造家造石高見立鑑」醸造新報 51 号付録

14) 紀伊毎日新聞 明治 44 年 6 月 11 日付記事

15) 奥田晴彦：関西鉄道史、p. 113 他、2006. 7. 1

16) 前掲 14) 記事

17) 前掲 10)

18) 森田家史料「森田から逸平への書簡」大正 13 年 11 月 6 日 戸籍では死亡は 5 日となっており、両資料に齟齬がある。

19) 森田家史料の中に森田や土地会社の資産目録というべき史料が 4 点含まれる。これらを仮に「資産目録 A」、「同 B」、「同 C」、「同 D」と名づける。A は「新和歌浦森田氏所有地及建造物表」と表記されたペン書き B5 罫紙 4 ページのもの。土地は字・地目ごとの合計であるが、建物の把握には有益である。制作年の記載はないが、仙集館が含まれることから 1919 年から土地会社が破綻する 1924 年までのものと見られる。B は「新和歌浦 資産及収入目録」と表記され、森田の自筆墨書 B5 罫紙全 44 ページのもの。内容は有価証券・不動産・動産・借地借家収入・水道料収入などが記されていて、後二者は本史料のみにみられる。これも制作年がないが A と同様の時期に記されたとみられる。C は「不動産目録(評価鑑定入) 并ニ動産権利目録」と表記されたペン書き B5 罫紙全 18 ページのもの。これも内容から同時期と見られる。「和歌山市福田重市〇評価鑑定ナリ」と記されている。D は、森田・土地会社の資産の中尾文三に売却することを取り決めた「契約証」2 通に含まれる別紙目録 2 通である。1 通は森田の不動産・権利資産で、他方は土地会社の資産が記されている。ペン書き B5 罫紙 2 通合わせて 32 ページのもの。1924 年 9 月 19 日の日付となっている。契約に関わる森田他関係者の印のほか「公証人平田武夫役場」との印もあり、公式なもの。

20) これらのことについては前掲 9) および、重松正史：郊外開発論争と市政－1910 年前後の和歌山市一、日本史研究 vol. 35、1992 年 7 月

21) 前掲 9)

22) 大塚惟明：元治元年 4 月 2 日生まれ。大阪ヨハネ教会を設立した牧師。その後、山陽鉄道、南海鉄道に入る。父磨は大阪商船社長、山陽鉄道取締役を歴任。「人事興信録」大正 7 年(第 5 版)より。社長在任期間は、1910 年 7 月～1915 年 4 月と 1923 年 4 月～1924 年 3 月の 2 期、小林尚一編：南海鉄道発達史、南海鉄道株式会社、pp56-57、昭和 13 年 9 月 1 日

23) 大塚書簡の差出年月等の推測

本文で 1910 年差出しとした 8 通の内、6 通の年は書面からの推測である。また、その内 1 通は月も推測である。以下に推測した根拠を示す。

No. 1 の差出年は、文面に森田所有地の記載があり、土地を買収した 1910 年以降のものとみられ、さらに、南海に出向き計画の説明を行っ

書簡 No	年	月	日	文面概要
1	(10)	3	13	森田、出島計画を南海に説明。大塚、現地視察を計画。御所有地…の文字
2	(10)	4	12	南海との協議に入る前提、測量調査など必要であることを提示。
3	(10)	4	14	南海技師による測量着手 2、3 日遅れる
4	(10)	(4)	20	測量明後日までに終了予定
5	(10)	4	22	測量着手
6	(10)	4	26	大塚の出島開発計画、協議の前提条件

()内の年月は推測、 年は西暦

ていることから初期の書簡と推測され 1911 年以降とは考えにくい。このようなことから 1910 年の差出と推測。

No. 2 と一連の 3. 4. 5 の差出年は、No. 2 に協議に入る前提の一つとして測量調査の実施をあげ、3. 4. 5 で具体的な測量の日程について言及していることから、4 通は一連のものと見てよいだろう。ゆえに No. 2～5 は 1910 年差出と推測。No. 4 の差出月は、同理由から 4 月差出と推測。

No. 6 は、協議に入る前提条件について No. 2 と同様の内容が含まれていることから、No. 2 と同様 1910 年と推測。

以上から差出年不明書簡も 1910 年の一連のものと推測した。
なお、上記 6 通以外の差出年月日記載のものは次の通り。
1910 年 4 月 30 日、同年 5 月 13 日、1911 年 1 月 6 日、同年 3 月 18 日、同年 5 月 18 日、1913 年 1 月 16 日。

24) 重松正史：郊外開発論争と市政－1910 年前後の和歌山市一、日本史研究 vol. 35、P. 16、1992 年 7 月

25) 原庄組工事経歴書(明治初期から昭和 30 年の経歴)には本工事は記載されていない。しかし分家の原正組の工事記念帖(大正 3 年発行)には記載されている。両史料とも原庄造氏蔵。

26) 1909 年のものは「和歌浦町細新地図(ママ)」、1912 年のものは「名所旅館案内和歌浦地図」との異なる名称が付けられているが、発行者・地図の構成などは共通し、後者は前者の改訂版とみられる。溝端佳則氏蔵

27) 小林尚一編輯：南海鉄道発達史、南海鉄道株式会社、p. 395、昭和 13 年

28) 溝端佳則氏所蔵新和歌浦の絵葉書による。

29) 浜口彌 編：名所案内 和歌浦と新和歌浦、枇杷助彌生堂、p. 17、大正 8 年 7 月、溝端佳則氏蔵

30) 前掲 19) 不動産目録のほか前掲 5) 外観透視図がある。

31) 前掲 29) 名所案内、

32) 前掲 5) 仙集館設計図(図面は 3 層だが実施は 4 層)、その他前掲 19, 28

33) 前掲 28)、森田家史料の南海遊園株式会社設立趣意書(大正 14)には「水族館(大部分既設)…漸次経営し…」とある。両史料より森田の時代に概ね完成していたことがわかる。

34) 前掲 29)、19)

35) 森田家史料の中には次の 3 種の文書がある。大正 10. 3. 29 付、御影土地社長木村純治との新和歌浦温泉土地 k k 設立に関わる仮契約書の下書き。同年 6. 2 付、日本運輸 k k との新和歌浦土地建物商事 k k の設立に関わる仮契約書。同年 11. 28 付、帝国土地開拓 k k への併合に関わる覚書。

36) 旧土地台帳による。これによると、この間に売却された土地は 1482 - 6、同 - 64～68、1484 - 2 である。

37) 森田家史料の中に本る契約書が 3 通含まれる。1 通は長男逸平・森田・中尾文三の間で交わされたもの、1 通は土地会社・中尾の間のもの、残り 1 通は森田・中尾の間のもので買戻し予約の契約である。

38) 森田家史料、南海遊園株式会社設立趣意書

39) 小林尚一：南海鉄道発達史 1938
南海電気鉄道株式会社：南海電気鉄道百年史、1985

40) 前掲 39) 南海電気鉄道百年史 の年表による。

41) 浜寺と大塚については、大塚惟明談：南海鉄道の濱寺経営、濱寺海水浴 二十周年史、pp. 83-88、1926

(2008 年 5 月 7 日原稿受理、2008 年 9 月 29 日採用決定)